栗野・徒然日記

参帖の壱・冬

令和二年十一月から綴り始めた「栗野・徒然日記」を、春(三～五月)、夏(六～八月)、秋(九～十一月)、冬(十二～二月)の季節ごとに再編集しました。

栗野の四季折々と日常をつれづれなるままに。

それでは一筆!!

2022.12.3　霜降る

昨日の朝、霜が藁の上に降ったような兆しもありましたが、今朝は屋根や野原を一面、霜が降りています。

半月ほど前の日記に書いた路傍のスミレの返り花も、葉上の霜が朝日に輝いています。

タンポポは、霜で化粧したロゼットの葉が一際目立ちます。それにしても、眠りについたタンポポの株もあれば、花を地面すれすれに咲かせている株もあり、春先のように花や種を付けている株もあるのは、面白いものです。

今年も早や師走、いよいよ冬本番を迎えます。

▲霜で化粧したタンポポのロゼット状の葉。

▲地面すれすれに咲いている株も。

▲地面すれすれに咲いている株も。

2022.12.16　岐阜県庁

約 500 億円をかけた岐阜県庁の新庁舎が竣工。旧棟の東側にそびえ立つ。

司町と名前の示す通り、中心部の官庁街からわざわざ郊外に移転したのが、昭和 41 年のこと。京町小学校の高学年だった私の担任教師が、引っ越し先は「藪の田の中だ」と怒っていたのを鮮明に記憶している。道路計画や用地確保など、諸課題もあったろうが、地方都市に副都心はあまりにも不要だった。中心市街地の衰退の一因だろう。鉄道もバスも、交通機関も不便だ。県庁が住民とは関係ない立ち位置にあることの証左でもあるが、連携すべき県都の岐阜市役所とい。の遠距離は、大きな課題があったろう。コンパクトシティも道州制もどこへやら･･･。新しい時代をリードする役割と機能と専門性を発揮できるか、注目したい。

2022.12.21　霜化粧

　冷え込みが厳しかった一昨日からちらついていた雪もおさまり、最近理由を付けてはさぼっていた早朝散歩に出かけました。
　昨日は、山の半分ほど上がうっすらと白くなっていましたが、今朝は見られません。
　冬枯れの木々の侘しさはさておき、寒さに負けずに咲いているサザンカやローズマリーの花弁や葉の縁が、霜の輪郭を帯びています。そんなけなげな様子を見つけられるのも、散歩の醍醐味です。でも、今年の寒さは何となく身に沁みますね。

▲ローズマリーの花も葉も霜をまとっています。

▲枯れたエノコログサの穂が、まるで霜柱のように輝いていました。

2022.12.24　雪のクリスマスイブ

　予報以上の大雪となりました。名古屋でも８年ぶりに10cmの積雪だったと言います。粟野でも20cmはありそうです。今日はクリスマスイブですが、この日の積雪はもう何十年も前になりますね。夕暮れ近くに降りだし、あっという間に積り始め、夕方のラッシュ時は大混乱。困ったのは、予約していたクリスマスケーキの受け取り。まだバターケーキだったかもしれませんが、家で待つ子どもたちは、雪を見る喜びとケーキの届かぬ様子に一喜一憂したことでしょう。クリスマスケーキの起源は、昭和５年頃、不二家が仕掛けたとか。ちなみに、昭和２年から昭和22年まで、クリスマスは休日だったとも言います。

　午前中に雪は峠を越え、地温もまだ高いのでしょう、道路の雪も早く溶け始めました。

　トップ写真はＸｍａｓには、およそ似つかわしくない干し大根。この日、取り込んで二度目の漬け込み作業。例年より遅くなりましたが、うまく水が上がるでしょうか。最初の樽の沢庵を夕食の膳に。まだ浅漬けの状態ですが、塩と糠と鷹の爪だけが原材料の味は、格別。我が家のクリスマスイブでした。

▲“ぐるっとバス”はほぼ定刻通り。さすがに乗る人も少ないのでしょうね。
降りしきる雪の中、“ぐるっとバス”が走り抜けていきます。

2022.12.27　１年を振り返って

今年も押し詰まってきました。一年の記憶も早や定かには蘇りませんが、改めて振り返ってみました。

一時は収まる気配も見られた新型コロナは、再び猛威を振るっています。一方、屋外のイベントは再開されつつある中、キムタクの騎馬武者行列(11 月 6 日)が記憶に新しいですね。地域では、3 年ぶりの大龍寺灯籠まつりに多くの人波が見られました。

自然界に目を向けると、120 年に一度開花するハチクが畜産センター付近に見られました。縁起が良いのか悪これま。これまた新型コロナがもたらしたパンデミックは困りものですが、吉祥の兆しと思いたいですね。

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻と物価上昇、安倍元首相の暗殺と統一教会問題など暗い話題が多かった今年、来年は明るい年となりますように。

▲大龍寺の灯籠まつりの賑わい(8 月 18 日)

▲120 年に一度のハチクの開花(4 月 16 日)

2023.1.11　鏡開き

▲ちょうど一月前のホームセンターの園芸売り場(12 月 11 日撮影)

▲縁起物のオモトも、庭で実を付けて新年を迎えました。

地方によって異なるようですが、鏡開きの日は一般的には 11 日とされているようです。子どもの頃から、7 日には正月飾りを片付け、神様が宿っておられる鏡餅も下げていました。この地方では、年神様のおいであそばす松の内が 1 日から 7 日までですから、7 日ではまだ 1 日早い気もしますが、あまり長く飾っておくものではないとする地域もあるようです(ちなみに、1662 年に徳川幕府が月 7 日をもって飾り治めとするとの通達を出したそうです)。

今はプラスチックに覆われ、橙もプラスチックになってしまいましたが、三宝にウラジロと昆布を敷き、橙をのせた鏡餅は、鏡開きの日には、青カビに覆われていました。カチカチに固まった鏡餅を叩いて割るのも一苦労で、ぜんざいなどにしましたが、カビの味と香りにはどうにも閉口したものです。今と違って暖房もない部屋でもカビが生えたのですから、記憶は定かではありませんが、鏡餅を開く日は 7 日ではなく 11 日の頃だったのでしょう。

正月飾りの風習も次第に少なくなりました。もとより、一時期、車の前面に飾られていたしめ飾りも平成に入る頃にはとっくに姿を消しました。年神様の目印だった門松も、山を荒廃させるからと一時期は印刷物の貼付が奨励され、その紙も平成のはじめに配布されなくなりました(自治会で配布している地区もあるようです)。門松飾りを行っている家庭、国旗を掲揚している家庭はほぼ見かけません。

その一方、ハボタンは縁起物として園芸店では売られています。紅白の色がめでたいこと、もともとボタンだったのに代わり安価なハボタンとなったことなど、新年を迎える花飾りとなった模様。

いわれはともかく花の少ない時期、ハボタンはガーデニングにはもってこいだし、ちょっぴり正月気分を味わいたいもの。

2023.1.20　大寒

▲名前の由来は、花の下にある葉の形が「仏様の台座に似ているからとのこと。

今日は大寒。立春まで厳しい寒さが続く。子どもの頃の印象では、節分のころが一番寒かった印象があるけれど、窓を開け話して豆をまいたときの外気が冷たく感じたのかも知れませんね。

岐阜市での観測史上、過去最低気温は、-14.3℃（1927 年 1 月 24 日）と言います。本当?!　最近は、せいぜいマイナス 4 度程度だと思いますから、昔は随分寒かったのです。夏の暑さも子どもの頃はせいぜい 32 度でしたから、今は 8 度は高い。世界平均気温は工業化前と比べて、1℃余り上昇していると言いますが、平均とは言えちょっと少なく見積もりすぎじゃあない?

過去最低気温を記録したまさに 24 日から 25 日にかけて、10 年に一度という寒気がやって来るとの予報。平均して 10 年に一度なので、普段温かい地域では 20 年に一度なのかもしれません。

穏やかな日が続いたのに浮かれて咲き始めたホトケノザが、霜に覆われていました(写真)。春の七草のホトケノザとは異なる種類ですが、本来 3 月頃に開花する草花。今朝の冷え込みにも負けずに咲いていましたが、最強寒波も乗りって咲き続けられるでしょうか。

2023.1.21　「欵冬華（ふきのはなさく）」

　フキノトウが恐るおそる顔を出しています。蕗の花咲くと言うものの、蕗の薹が出始める季節と捉えられます。早い年には、年末に陽だまりの中で収穫期を迎えることもありますが、今季はまだまだ固い蕾です。
　ちょっとかわいそうな気もしますが、さっそく湯豆腐に刻んで頂戴しました。香もさることながら、口の中は、春よ来い、早く来い･･･♪　ちなみに、カルシウム、カリウムが豊富に含まれている栄養満点の食材だそうですよ。

2023.1.25　ツバキとサザンカ

　10 年に一度の最強寒波襲来･･･幸い、この地域では水道管も凍り付かず、心配していた雪も数 cm 程度の積雪で済みました。時折粉雪が舞っていましたが、日差しも顔を出し、散歩に出かけてみました。日陰の道路は凍てついているので、足を踏みしめながらゆっくりと。
　団地の山影にはツバキが、団地の生垣にはサザンカが雪化粧しながらも鮮やかな紅色の花弁を広げていました。
　よく似ていますが、サザンカの方が開花時期が早いこと、葉が少し小ぶりなこと、ツバキより花弁が全開することなどが挙げられます。また、サザンカは花弁がバラバラに散りますね(ツバキにもそういう品種もありますが)。
　では、トップ写真はどちらでしょう。答えは、サザンカ。写真ではちょっと見分けがつきにくいですよね。

▲これはサザンカです。花弁が全開。

▲山際に自生していたツバキも雪化粧。
まだ蕾が多く、見ごろはまだ先のようで

2023.2.1　立春間近

今日から２月。もう一月が過ぎ去ったのですね。

夜明け前が一番暗いと言いますが、立春前のこの寒さ、心身にこたえます。雪模様の日々が数日続きましたが、日差しが見られるようになりました。とは言え、夜の冷え込みの厳しいこと。

そんな厳しい季節にもかかわらず、早咲きの鹿児島紅梅が、雪や霜にも痛まずに、膨らみ始めています。

春は少しずつ近づいています。

▲眉山の雪景色（1 月 28 日）

▲雪にかすむ眉山（1 月 29 日）

◀雪にも負けず咲くタンポポ

2023.2.11　春めく

昨日の朝から降り続いた雨も上がりました(関東以北では雪になったみたいですね)。朝陽が差し始めると、木の幹や草原から湯気が立ち上っています。気温はぐんぐん上がり、すっかり春の陽気に。吹く風が心地よく感じられるほどです。

路傍にはサファイア色のオオイヌノフグリがきらめいています。1月20日の日記にお目見えしたホトケノザも寒さを乗り切りピンクの花を咲かせています。

雪が雨に変わる「雨水」を1週間後に控え、一足早い春の訪れに、衣服も心も軽くなりますね。

岐阜市の喫茶代の支出額は相変わらず高く、昨年の家計調査でも断トツの全国一位。田んぼの中に位置する店が流行っているのも特徴的。これからの季節、陽気に誘われ、田畑の作業が本格化したりで、モーニングを楽しむ人々でますますにぎわう季節となります。

◀昨夜の雨に濡れた樹皮の水分が蒸発し、早朝の冷気で冷やされ、湯気のように立ち昇っています。霜が降りた草むらからも同様の現象が見られました。

2023.2.19　雨水

暦の上では、雨が雪に変わる季節。朝晩の冷え込みは厳しいのですが、暦のとおり今日の雨は春雨のように細く、優しさを感じます。

岩野田北まちづくり協議会の定例まちづくりサロン(第3日曜日午前10時～)が、公民館で開催されました。誰もが気軽に参加し、まちづくりへの思いを自由に語り、地域の課題や解決策を見つけたり…サロンは、まちづくりに欠かせない場になりつつあります。

今回、市の了解を得て印刷した「新・岐阜市史」の第2部第3章「市民主役のまちづくり」を、参加者に配布しました。各種団体の成り立ちや、まちづくり協議会誕生の背景などが分かり、サロンの参加者にもおおむね好評でした。

「啐啄同時(そったくどうじ)」という禅語があります。師匠と弟子の呼吸が一致するときに、悟りが得られるということから(「啐」は、鳥の雛が孵化するときに殻の中から鳴くこと。「啄」は、母鳥が外から殻をつつくこと)、呼吸がピッタリと合う、絶妙なタイミング、機会を指します。市史の資料は数年前に用意されていたものですが、市史を読破するのはたやすいことではありません。配ってもおそらくどこかに片づけられてしまうか、捨てられてしまうでしょう。それでもきっかけとして資料を配布することも一つの方法ですが、知りたい人にタイミングよく情報提供することも欠かせません。

まちづくりって何のことか分からない、との繰り返しから始まり、早や10年余り。

コミバスの運行やあいさつ運動など、地域のまちづくりへの認識は進化し、深化しつつあります。

市史の原本は、公民館で閲覧できます。第3章の資料は今後もサロンなどで希望者に配布する予定です。